人権コラム「きずな」6月号

今年も１回生がやってきた！

佐久間敦史（大阪教育大学）

4 月、大学前の駅から柏原キャンパスまでは、色とりどりの桜で埋め尽くされます。朝、学生たちは、満員電車から一斉にホームに降り立ちます。笑顔、明るい声、明日への希望に満ち溢れた学生たちとともに桜の間を抜け、講義に向かうのがとてもうれしい時期です。初回、緊張した面持ちの 1 回生からは、苦しい受験勉強を終え、希望叶って本学に入学し、将来を見据えて「凛」としたまなざしが注がれます。「あなたたちに会うことを楽しみにしていた。教育に厳しい目が向けられることも多いが、それでも教職を志すあなたたちを大歓迎する。変化の激しい今日にあって、最も大切なことは子どもたちの未来であり、教育である。教師は、子どもたちと共に歩み、明るい未来を指して導く、感動にあふれた素晴らしい職業だ」と伝えます。

「指さし」ができるのは、基本的には人間だけです。教師は、子どもたちに向かってほしい方向（目標）を指し示し、「あそこを見てごらん。あなたならきっとたどり着ける！」と励まします。だから、教師は常に子どもたちに寄り添い、「上」ではなく、子どもたちと同じ立ち位置にいます。そこから、子どもたちを主体的に歩ませ、もしも、あまりに危険で間違った方向に進もうとすると、後ろから、あるいは半歩前に出て、「もう一度考えてごらん」と導きます。この、「指して導く」という行為が、「指導」です。

2020 年 4 月末の今日、学生たちは大学にいません。「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」により、入構禁止措置・遠隔講義形式をとっているためです。まだ見ぬ新入生たちは、困難と不安の中で、学友と離れ、一人ぼっちで PC を操作して受講しています。「対面での授業がとても待ち遠しい」という、新入生たちから届いた言葉です。

「ずっと教師になりたいと思い続け、やっと大教大に入学し学べる機会が持てたので、全力でがんばります」「子どもたちの成長に寄り添う授業を展開できるような教員をめざして、しっかりと学んでいきたい」「子どもたちが夢中になって、時間を忘れてしまうような授業ができるようになりたいです。毎回の授業を大切にしてがんばります」「これから教員になるための勉強をして、教師の立場になっていくのだなと思うと、とてもワクワクしています」…。抑え込み、管理し、教え込むような教師ではなく、子どもの人権を大切にして、「指して導く」ことができる、とても楽しみな教師の卵たちの入学です。